

佳作

ある医師との御巢鷹山慰霊登山を経験して

根岸一仁（大正富山医薬品株式会社 札幌支店）

平成19年は入社25年目に当たり、一貫して営業に携わってきた私にとって一つの節目の年であった。会社からも勤続記念の表彰を受ける事が出来た。まだ人生において振り返る年代では無い事は十分承知しているが、忘れ得ぬある医師との出会いがその後の私のMR活動に少なからず影響を与えたのは間違い無い事実であり、その頃の記憶を辿りながら一筆申し上げたい。

平成2年当時私は群馬県を担当していたが、その時高崎市N病院のF医師と出会った。F先生は取引先の医師であり、私は担当者として通常のMR活動に日々取り組んでいた。そんなある日私に向かって「もし良かったらいっしょに御巢鷹山に行かないか？」と唐突に誘って来られた。御巢鷹山と言えばご存じかもしれないが、今から約20年も前に起きたあの痛ましい航空機事故の墜落現場となった山である。史上最大の犠牲者出しご遺族の方々が毎年の様に慰霊登山をされる様子はテレビ等でご記憶の方も多いと思う。さて話しを戻そう。F先生との会話の成り行き上、私は登山理由を伺ったのだが、その時意外な答えだったので何故か覚えている。F先生は次の様に言われた。「検死した際ご遺族の方からね、先生は近くに住んでいるのだから、出来たら代わりに登山してほしいと頼まれた。ご遺族の方は遠方に住んでいて又ご高齢でもあり登山は無理の様だ」と。私は最初F先生の身内の誰かが犠牲者となったのだと思っていたので少し驚き又先生の妙な律儀さにも感服していた。私は登山する意思のある事を勿論F先生に伝えて、その準備をしながら、そしてぼんやりと数日後の登山当日を迎えていた。

登山には卸業のT薬品K所長（当時）にも協力してもらいF先生と3名で臨んだ。多野郡上野村まで車で行き、そこから歩き始めたがハイキングコースくらいに軽く考えていた私は正直、面喰らった。雑草ばかりで舗装もされず又急な斜面ありの獣道のような登山道であった。どのくらい歩いたのだろうか、やがて「みかえり峠」に差し掛かった時一瞬息を呑んだ。そこから見える光景はまさに墜落現場であり、きっとその時の火災で生じたのだろうか、黒焦げた航空機の形状をした山肌が飛び込んで来た。不思議な感情に包まれ言葉を失っていた。F先生も口数は減りほとんど喋らなかった。更に近づくとその現場にはあちこちに碑が建ち、まるで外人墓地の様に整理されているのに気がつく。F先生はその犠牲

になられた方を探していた。あまり覚えていないがたぶん私もいっしょに探したのだと思う。しばらくしてからF先生の「ああ～ここか」で探し当てた事がわかった。「辛かっただろうな」と言って涙を流されていたのを覚えている。その後しばらく沈黙の時間が流れたがなんと長く感じられた事だろう。医師の涙を見たのは初めてだった。T薬品K所長と私は只茫然と立ち竦くみ身動きが取れずにいた。更にF先生は「検案書に死因は全身挫滅と記入したのだがこんな死因を記入したのは初めてだ」と言われたのも印象に残った。こうして感慨深かった登山は無事終了した。数日後N病院でF先生に会ったが、先生は「付き合い合ってくれてありがとう。」そして続けて「薬も同じだな。一歩間違えれば大惨事だ。」とぼつり言われた。F先生が何を言いたかったのか、私にはその言葉だけで充分であった。そしてこの一連の体験が私のその後のMR活動でのターニングポイントの「出来事」となったのは言うまでも無い。さて今回の体験を踏まえて日常業務との関わり合いを私なりに考察してみたい。

MR活動の中で最重要項目のひとつである『薬剤の安全性』という使命から考えて見ると、周知の通り企業の薬剤の開発段階から認可を受けて上市する迄の責任と市場で一定の評価を得る迄の「適正使用」確立の為の情報収集活動が如何に重要であるかを改めて痛感する。副作用発現率や詳細事例は医師薬剤師等医療従事者にきちんと伝えねば「大事故」に成りかねず、現場では私は患者の為に正直でありたいと考える。何故なら自分や家族がいつ何時でも患者の立場に成りうるからだ。更に時代もこの様な流れを益々要求して来ており、発売したばかりの薬品には市販直後調査を義務付け企業もその管理を徹底している。平成19年の世相を反映した漢字「偽」はこの業界では絶対あってはならぬ事だと痛感した。不幸にして「犠牲」になられた方々が今の安全性確立の礎になっているのは紛れもない事実である。そしてこれを決して忘れてはいけない事も実感出来た。

時は移り今札幌勤務となり立場は管理職に変わり部下を持つ身となったが、F先生の事を時々思い出しては身を引き締めてMR活動に取り組む毎日です。